

# バスケットボール競技におけるコーチングフィロソフィーの明確化 元リトアニア代表ヘッドコーチ アンタナス・シレイカ氏に着目して

エリートコーチングコース

5013A325-1 大野 篤史

研究指導教員：土屋 純 教授

## I. 序論

トップレベルのコーチたちは、チームを勝利に導く過程において様々な経験を通し、それらに関する高度な「経験知」、「暗黙知」を有しており、それらは他のコーチにとって必要な知識として活用できる。しかし、これまでにトップレベルのコーチたちの「経験知」、「暗黙知」が公表されることは少なく、コーチ育成の観点からこうした知識の共有化が重要な課題となっている。ここでオリンピック競技大会のバスケットボール競技に目を向けると、1992年開催の第25回オリンピック競技大会（バルセロナ）にアメリカ代表としてNBA選手が参加して以降、オリンピック競技大会はアメリカの独壇場であった。しかし、近年では徐々にヨーロッパ、南米の競技レベルが向上し、アメリカとの差が縮まってきている。このように、アメリカと他国との差が縮まってきているにも関わらず、これまでアメリカ人以外のトップレベルのコーチが持つコーチングフィロソフィーについては明らかにされてこなかった。アメリカ人以外のトップレベルのコーチの一人として、リトアニア代表監督として2003年の欧州選手権でリトアニア共和国独立後初の優勝を果たし、第28回オリンピック競技大会（アテネ）ではNBA選手を擁するアメリカ代表に初めて勝利したアンタナス・シレイカ氏をあげることができる。

そこで本研究では、アンタナス・シレイカ氏に着目し、彼の長年の経験で培ったコーチングフィロソフィーを明らかにすることを目的とし、今後の日本におけるコーチ育成の一助につながる資料を作成する。

## II. 研究方法

本研究では質的調査を行い、半構造化インタビューにてデータを収集し、SCAT法（Steps for Coding and Theorization）にて分析を行った。

## III. 研究の結果および考察

### i. コーチングにおける基本理念

コーチングを行うにあたり大切にしているシレイカ氏の考えは、コーチとプレーヤー、プレーヤー同士、さらに、バスケットボール競技に対して「忠誠心」を持つことである。コーチとプレーヤーが互いに「忠誠心」を持つことで両者の間に信頼関係を築くことが可能となる。また、プレーヤー同士が信頼しあい、まとまってプレーすることでプレーヤー自身のパフォーマンスだけではなくチームとしても良い結果を残すことができる。さらに、コーチがバスケットボール競技というスポーツの素晴らしさをプレーヤーに享受することで、プレーヤーがバスケットボール競技に真摯に向き合うことができるであろう。

### ii. バスケットボール競技において求められる能力

シレイカ氏は、バスケットボール競技では運動能力や身体的条件だけに限らず多様な能力が求められるとしている。バスケットボール競技の特性の1つである攻防の切り替えの速さのなかでプレーの選択肢を増やすには状況判断が必要であり、そのためには、様々な情報をいち早く理解し処理する能力が必要となる。この能力を習得するためには、一手先、二手先をイメージする訓練が求められる。

### iii. コーチングする際のポイント

#### 1) 育成期間において行うべきコーチング

シレイカ氏がスキル面で重要視していることの1つは、ドリブル、パス、シュートといったバスケットボール競技における基本動作を「左右対称」で行えるようにすることである。また、この基本動作の習得を14歳までの育成期間に行うことが望ましいとしている。2つめは「スピードの感覚」である。スローな動きを試合において使用することや、身に付いてしまったスローな動きを改善することは困難となる。さらに、シレイカ氏はコーチングにおい

て成功体験を与えることを重要視している。

## 2) コーチングの順序

シレイカ氏のコーチングの展開では、第1段階の2年間で基本動作、第2段階で1対1に必要なディフェンスの要素をプレイヤーに習得させる。第3段階では、相手のプレーの邪魔になるところに意識的に位置を占め、ディフェンスの協応動作を遅らせて攻撃するグループ戦術の一種であるオフボールスクリーンとピック・アンド・ロール (P&R) の2対2を習得させる。第3段階の2つのプレーをコーチングすることにより、プレイヤーの情報処理能力を養うことが可能になる。

## 3) オフェンス・ディフェンスのコーチングのポイント

シレイカ氏は、オフェンスにおいてファストブレイクと P&R を重要視しており、ファストブレイクは激しいディフェンスを行うことによって生まれることから、積極的なディフェンスを行う必要があるとしている。また、P&R のコーチング場面では、状況判断を中心にコーチングすることに重点を置いている。一方、ディフェンスにおいては絶対にやられないというメンタリティーを植え付けることを基盤としている。この基盤のうえに、様々な状況の変化に対応できる判断力を備えることを位置づけている。また、P&R に対するディフェンスをコーチングしながらオフェンスにもディフェンスがどのようなディフェンスしているのかを判断するようコーチングを行い、オフェンス・ディフェンスどちらにも状況判断を徹底している。今日のバスケットボール競技におけるディフェンスの主流は、様々なシステムを何通りも使用するものである。このディフェンスのシステムが変わる戦術を習得するためには、瞬時の状況判断が必要になる。

## iv. ヨーロッパにおける国際競技力の向上要因

ヨーロッパの人々は、オリンピック競技大会に NBA プレイヤーが出場するようになり、アメリカの独壇場になったことを悲観的に考えてはおらず、トップのチームを倒そうという民族意識が高まっていった。また、メディアの発達により、NBA においてヨーロッパ出身のプレイヤーが活躍する姿をヨーロッパでも見られるようになった。このことにより、バスケットボール競技に対する興味・関心

が高まり、競技の浸透を促し、ヨーロッパの競技力向上につながったと推察される。

## v. リトアニアのコーチングコンセプト

リトアニアでは、早期のポジションの固定や戦術を重視した過去の誤ったコーチング方法を改め、現在のコーチング方法を確立していった。また、14歳までの育成期間にバスケットボール競技を楽しませるコーチングを行っている。これは、育成期間のプレイヤーをバーンアウトさせないために必要なことであり、その後のキャリア形成においても非常に重要となる。さらにリトアニアでは、コーチ同士がこれらのコーチング方法を共有し、知識を高め合っている。

## vi. 日本への提言

シレイカ氏は、日本のバスケットボール競技の競技力向上のために子ども達の育成が重要であるとし、育成のための方策としてプレイヤーの海外への挑戦をあげている。海外のレベルを肌で感じ日本に伝えるプレイヤーが増えれば、日本のバスケットボール競技の競技力は上昇するものと考えられる。また、シレイカ氏は日本にあったプレースタイルとして、早い展開のバスケットボールスタイルをあげている。「個の力」を上げることや、瞬時の状況判断に優れたプレイヤーを育成することで、プレーの精度を高め、ミスが少ない早い展開のバスケットボールスタイルを確立することが、日本のバスケットボール競技界に求められる。

## IV. 結論

シレイカ氏のコーチングフィロソフィーとは、コーチとプレイヤー、プレイヤー同士がお互いに対して、さらにコーチとプレイヤーがバスケットボール競技に対して「忠誠心」を持つことである。コーチには、プレイヤーとバスケットボール競技に対して「忠誠心」を持ってコーチングすることが求められる。このことは、アメリカ人のトップコーチと大きな違いはみられなかったが、バスケットボール競技において求められる能力や、実際のコーチング方法は実に興味深いものがあつた。本研究で見出された新たなコーチング方法が、今後の日本におけるバスケットボール競技のコーチングに対する一助になることを期待する。